

Title	時の記念日のために (時と暦の特輯)
Author(s)	水野, 良平
Citation	天界 = The heavens (1941), 21(240): 178-178
Issue Date	1941-05-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/168205
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

究に移り王室建造物の管理者となり、又建築術に關した10卷よりなるローマの建築家ヴィトルヴィウス・ポリオの著書を翻譯して名聲を馳せた。因みに其の中の1卷は日時計及び水時計の製法に關したもので、ペロールは其の一部の組立をすら試みてゐる。

惟ふに水時計や地方時を用ひてゐた古代から、醫學用クロノグラフや世界時を採用する現代に至る迄には、實に久しき年月を経てゐるのであるが、其の間にあつて常に醫學が測時法及び時計製造術の發達を促すに與つて力のあつた事が認められるのである。

時の記念日のために

時の觀念をはつきりと、正しくもつやうにと、毎年六月10日を「時の記念日」としてさまざまな催しが行はれます。

もともと人間には、遠く原始時代に於てさへ時の長さとか1日の時刻といふやうなものを知りたいといふ願ひは持つてゐたもので、御承知の日時計、水時計、砂時計、油時計といふやうなものなどはいづれも紀元前のものなのです。

そんなものから進んで、次に出來たのが齒車を利用した齒車時計、それからゼンマイを利用したゼンマイ時計、持ち歩かれる懷中時計、船などでゆれても大丈夫なクロノメータールといふ順序ですが、天文時計としては近年リフラーやシンクロノムといふのが出來ました。ガラスのおほひで密閉しこの中の空氣を抜き、溫、濕度、氣壓の變化から來る影響を避け電氣で動かすのです。しかし機械である以上、それでも時に狂ひの生じないことはありませんが、それは多くて1秒の百分の2—百分の3ほど遅れたり進んだりするのです。

次に電氣の「シンクロナス・モータール」所謂電氣時計があります。近頃ビルディングや學校、お役所、家庭などでも電燈線からすぐとれるあれです。これならネジをかける世話もなし、止まる心配もありません。時間はこの發電所の時計に合つて動くわけですが、最近はもし停電するやうなことがあつても、それと同時に自動的に動くやうなしかけのものも出來たので、恐らくはこれが家庭一般のごく普通のものとされるのも數年のうちでありませう。

次にこれこそ最も完全な天文時計として天文臺に据付中の時計に水晶發振時計といふのがあります。水晶は交流の電氣を通ずると非常に規則正しい振動をするもので、それを利用してつくつたものです。しかしもうかうなれば時計とは云つても實用的な時刻を知るといふよりは、學術的な研究に使はれるものとなります。(水野良平氏)